

ヘッセから翻訳者へ御礼のメッセージ

教材：「少年の日の思い出」(「現代の国語1」三省堂 他)

「少年の日の思い出」は多くの教科書に掲載されて、日本人の多くが知る話となっています。作者のヘルマン・ヘッセもきっと喜んでいると思います。そこで、ヘッセになったつもりで翻訳者(高橋健二さんや岡田朝雄さん)に御礼のメッセージを書きましょう。



指導のねらい

学びを広げよう 優れた表現を見だし、なぜその表現が優れているのか、理由を書く中で内容の理解を深め、文章表現への感覚を磨くことができる。また、翻訳者の異なる「少年の日の思い出」を読み比べて日本語の微妙な違いを知り、どちらがその場に相応しい表現であるか、自分なりに考えることができる。例えば、最終場面でのエーミールの言葉「けっこうだよ」(高橋訳)と「どうもありがとう」(岡田訳)とでは、後者の方が皮肉が強烈である。比較は、内容理解を確かなものにし、語感を鋭くすることができる。



評価の例

- 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにする。 (C(1)オ)
A……優れていると考える表現を引用し、なぜその表現が優れているのか、その理由を文章の内容に関わらせて述べている。
B……優れていると考える表現を引用し、自分の感想を述べている。
- 語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意して話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。(知識・技能(1)ウ)



時間配分
(目安)

- ① 導入(課題の説明) …… 5分
 - ② はがき新聞の作り方説明 …… 5分
 - ③ はがき新聞の制作 …… 30分
 - ④ 振り返り・交流 …… 10分
- グループで、お互いの作品を紹介しあう。

学びを広げるポイント

- 作品はミテミテ(理想教育財団助成品)に入れて展示する。友達作品を読むことで、「少年の日の思い出」の他の優れた表現に気づかせる。
- 教科書とは異なる翻訳者の「少年の日の思い出」も紹介したい。

参考：「訳本」の比較で、思考力・判断力・表現力を高める文学の授業(中刈正堯監修『「新たな学び」を支える国語の授業』、三省堂、2013)

